ぼくとカブトムシとクワガタと

八南小　6年　笹内　宏太郎

ぼくの家には、カブトムシとノコギリクワガタとコクワガタがいる。みんな、元気に暮らしている。このみんなと出会ったことは、いつになっても忘れないだろう。なぜなら、この十一年で初めて、カブトムシとクワガタを飼ったからだ。

それは、夏休みが始まったころだった。赤塚山　ぎょぎょランド）には、カブトムシやクワガタが出てくる。毎年ぼくは、近くに流れる川にいる魚をつかまえて飼うというのが、この季節の定番だった。だが、今年は異常気象で雨の日が長く、川が増水している日が多かった。そこで、今年はカブトムシとクワガタを飼うことに決めた。ぼくは生まれて初めて、カブトムシとクワガタをとりに行った。車に乗りながら、カブトムシとクワガタをとる想像をしていた。想像の中だと、カブトムシとクワガタは、ぼくの手が届くぐらいの木にいて、たくさんとれるというのが、ぼくの想像だった。だが、実際はちがっていた。クワガタは高いところにいて、カブトムシはなかなか見つからなかった。ぼくは、カブトムシが見つからないことと、クワガタが高いところにいることにがっかりした。やはり人生想像通りに上手くいかないものだ。

だが、ここであきらめるわけにはいかない。ぼくはある作戦を考えた。それは、長いほうきを持ってきて、クワガタを落とすという作戦だ。少しかわいそうな気がするが、これしか方法がない。作戦は成功だったが、三割失敗だった。なぜなら、落ちてくるとき、ぼくをおそってくるからだ。クワガタはおそった後、地面に落ちる。ぼくはそこをねらってとった。この方法でノコギリクワガタとコクワガタはとれた。だが、カブトムシはとるどころか、見つけることも出来ていない。

ぼくは、またまた作戦を考えた。その作戦とは、夜がダメなら朝という作戦だ。次の日の朝、四時から赤塚山　ぎょぎょランド）に行った。すると、カブトムシが木から下りてくるところを発見した。発見したときは、目をこすって確認するほどうれしかった。

ぼくは、カブトムシとクワガタをとって、家にもどったら、みんなの住まいづくりを始めた。ぼくの心の中には一つの思いがあった。それは、ぼくの思いのままに連れてこられた、カブトムシとクワガタに、少しでも、いいかん境を作ってあげようという思いだった。ぼくは、みんなが住んでいた所の一部を、丸ごと取ったようなかん境を作った。土は赤塚山の土にしたが、アリを発見し、はんしょくのおそれがあったので、土を買ってきた。買うときは、みんながすごしやすい土を選んだ。みんなに欠かせないのは木と落ち葉だった。木と落ち葉は赤塚山のものにした。このようにして少しでも赤塚山に近いものを作ろうと、工夫を重ねていった。みんなを入れ終わると、みんなは元気に歩き回った。みんなが気に入ってくれたように見えて、とてもうれしかった。

みんなの住まいづくりを終えた後、何か足りないことに気づいた。それはえさだ。そこで、みんなのえさを買いに行った。だが、ここで問題が起きた。それは、えさの種類がたくさんあることだ。そこで、ぼくが目をつけたのが、えさに入っている物だ。着色料等の化

学製品が入っていない、みんなが安心して食べられるえさを選んだ。みんなは喜んで食べてくれたので、安心した。

飼い始めた約一週間後のことだった。その日、ミステリーが起きたのだ。このミステリーはなんとも不可解なことだった。ノコギリクワガタが二ひきから四ひきに増えていたのだ。この原因はこの二つしか考えられない。一つは、初め数えたときの数えまちがい。もう一つは、本当に二ひき増えたかもしれないということ。実は、この日、二回ノコギリクワガタが飼育ケースからにげ出していたのだ。そのにげ出したと思われる合計二ひきが別のノコギリクワガタで、誤って入れてしまったかの二つしかない。そこで、インターネットで調べたところ、カブトムシとクワガタはフェロモンという物質を出し、仲間を呼んでいるということが分かった。だから増えた二ひきは飼っていたカブトムシやクワガタから放たれるフェロモンによって飼育ケースに来て、そこにぼくがきたため、ぼくはにげ出したとかんちがいをし、飼育ケースに入れた。そのため合計四ひきになってしまったということだろう。

みんなといっしょに過ごして来てから、もう約一ヶ月ぐらいが経っただろうか。あっという間の月日だった。みんなはよくえさの取り合いでケンカをしていた。ぼくには分からない。みんなは、仲間を呼ぶことが出来るのに、話すことができないだなんて。話すことがみんなに出来たなら、ケンカなんてしなくても、解決したかもしれないのに。だが、みんなは少しケンカをしたら、次は、えさをゆずり合うような行動を見せた。最終的には、ゆずり合い、仲良くなっていた。まるで、ぼくたち人間のようだ。色んなハプニングを乗りこえて“人間関係”ならぬ“虫関係”を築いていくのかもしれない。

カブトムシやクワガタの声はぼくら人間には聞こえない。しかしみんなと生活していると、まるでみんなが何を言っているのか少し分かるようになる気がする。みんなが元気に生活しているところを見ると、なんだか元気がもらえる。みんながうれしそうにしていると、ぼくもうれしくなる。ぼくはカブトムシとクワガタと過ごしている日々がとても幸せだ。

３・９